

第1回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

- (1) 議長及び副議長の選出について
- (2) 協議事項：今期の協議テーマの決定について
- (3) 報告事項：サッポロサタデースクール事業について
- (3) その他

2 日時

令和元年(2019年)8月29日(木)10時～12時

3 場所

STV北2条ビル4階 教育委員会会議室

4 出席者

(1) 委員(10名)

一戸委員、臼井委員、佐久間委員、鈴木委員、辻委員、土田委員、原田委員、牧内委員、安田委員、山口委員

(2) 事務局(8名)

長谷川教育長、鈴木生涯学習部長、中目生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、山田推進担当係長、寺崎社会教育担当係長、砂沢、小林、森戸

5 開催形態

公開(一般傍聴者0人)

6 会議内容

(1) 議長及び副議長の選出について

議長に佐久間委員、副議長に鈴木委員を選出した。

(2) 協議事項：今期の協議テーマの決定について

ア 事務局提案

事務局から、資料4「今期(R01～02年度)社会教育委員会議の協議テーマ(事務局案)」のとおり、今期の協議テーマ案として『防災に資する社会教育について』を提案した。

イ 合意事項

- ・今期の会議では「防災(災害)」を取り扱うこと

- ・「地域づくり」を視野に入れて協議を行うこと

ウ 次回会議の検討事項

- ・協議の方向性をどのような形にするか
- ・協議テーマの文言をどのようなものにするか

○主な意見・質疑応答は以下のとおり。

- ・社会教育は私ごととしてそれぞれが考える必要のあることだと思う。そのため、『防災に資する社会教育』という事務局案は、その必要性を市民に認識してもらおうという点において、とても意味のある事だと思う。その一方で、地域コミュニティの機能が弱りつつある中で、相互扶助の考え方を達成させることは難しいと感じる。そのため、そのあたりの課題について議論できればと思う。 **(原田委員)**
- ・防災も大切だと考えるが、市民の中の焦燥感、いらいら感、問題行動（煽り運転等）が気になる。そのあたりについて、社会教育の観点から考えることができないだろうか。また、人々の意識がばらばらになっている現状について、調和点を考えることはできないだろうか。防災というテーマに反対する訳ではないが、そうした部分について、人間的なアプローチを考えられないだろうか。 **(臼井委員)**
- ・臼井委員の考える問題点には共感するところがあり、人と人との繋がりが薄く冷たくなっている印象がある。LINE 等の普及により、人と人が顔を合わせて付き合う機会が減っているように感じる。また、町内会が成り立たないことについて危機感を覚えている。コミュニティづくりをどのようにすればいいかということは一つの課題だと認識している。 **(牧内委員)**
- ・去年の地震の際に、シングルマザーの方から「どこに避難していいかわからない」との連絡があり、二組の親子を事務所で受け入れた経験がある。困ったときに人々は、日頃関わっている地域の居場所に助けを求めるのではないか。しかし、シングルマザーのような方々には町内会に入っていないケースが多いため、NPO 等の支援団体の力を合わせる必要があると感じている。 **(安田委員)**
- ・東日本大震災を東京で経験し、主な被災地であった東北地方における被災後のまちづくりのプロセスに関わる機会があったのだが、防災は日常的な関係が凝縮して現れる場面として考えることができると思う。そうした視座に立

つと、各委員の意見や指摘は繋がるものだと思う。防災のための特別な取り組みと同時に、日常的な暮らしをどのように支えるべきかという議論が必要かもしれない。自分の生活スタイルと町内会の活動が合わない人も多いため、ただ町内会に頼れば良いというものではないと思う。現状にあった身近な関係作りについて考える必要があるのではないだろうか。（辻委員）

- ・町内会が合わない生活スタイルの人も多いのかもしれないが、高齢者の多い地域では町内会は心強い存在になっている。自分の住む地域では町内会が活発であり、そのため、去年の地震の際にも、地域でお互いの様子を確認し合ったり支え合ったりといったことができていた。その一方で、町内会の活動に参加できずにいる方々も多いように感じる。そうした方々は、去年の地震の際にも大変そうであった。少しでも顔見知りだったら助け合うことができたのと思う。地域みんなが顔見知り、というような昔ながらのスタイルの町内会から、何か見直しができないかと感じた。（山口委員）
- ・自分ひとりで災害等の問題に立ち向かうというよりも、共助という観点が大切で、そのあたりをどのように考えていくかという趣旨の発言が多かったように思う。（佐久間委員）
- ・去年の地震は全員が等しく直面した問題であった。その際の避難所運営によってコミュニティができたという事例があったため、防災からコミュニティづくりを考えることができると思う。（一戸委員）
- ・札幌は防災意識が低いと言われているが、一概にそうとは言い切れないと思う。実際に、子どもたちへの防災教育も行っているが、そうした活動は単にあまり知られていないだけかもしれない。また、大人に対する防災教育を考える機会は良いことだと思う。町内会の話が出てきたが、テーマを二つとすると二年間では足りないように感じる。（土田委員）
- ・地域の防災力が問われる時代であると言われてることを鑑みると、時機を得たいいテーマであると思う。中学生が SNS で呼びかけ被災した高齢者を助けたということも、共助の一例である。テクニカルな教育だけではなく、地域コミュニティにつながる方向で考えるといいのではないかと思う。また、地域の安全・安心を考えるうえで、車椅子使用者や何らかの障害があるような方々についても議論できればと思う。（鈴木委員）
- ・タイトル付けや切り口の問題はあるかもしれないが、事務局案とは違うテー

マにしようという意見は無かったように感じる。社会教育が災害を起こさないようにする、ということにはできないが、人が災害とどのように対峙するかということを考えることは大切だと思う。例えば、地域の問題に人々が気づき、それについて学び、繋がりをつくり、行動に移していくという段階があると思うが、それを社会教育行政としてどのようにサポートしていけるのかという視点で議論ができるのではないだろうか。防災はあくまでも地域の課題の一つとして捉え、地域課題に対する姿勢や対応といったより大きなテーマを掲げたうえで、防災をサブテーマのような形で議論するという方法もあると思う。（佐久間委員）

- ・今回の協議テーマ案について、社会教育としての取り組みや仕組み、あり方を整理するという認識でいいか。（鈴木委員）

→その認識で合っている。段階的に様々なアプローチがあるとは思いますが、協議を進めていく中で、地域づくりをどうしていくかというところに生きていくのではと考えていた。（中目課長）

→防災に対する教育は、防災のみならず、コミュニティや地域等にも生かされるテーマになっていると思う。そのため、防災をサブテーマに掲げつつも、社会教育全般について考えることができると思う。（鈴木委員）

→どんな活動が地域のなかで必要か、という視点と、その活動の実現のために社会教育行政に何ができるか、という視点で考える。それらを考えるために、具体的な取り組みや事例から学びながら議論していくものだと理解している。（辻委員）

- ・札幌市民の防災意識を高めるためにはどうすればいいか、ということ議論するという理解でいいか。（土田委員）

→今回の提案はあくまでも、テーマとして防災を一つの切り口としてはどうだろうかという趣旨のものである。そこでの議論が最終的には、コミュニティづくりや地域づくりに繋がることかと考えている。防災意識を高めていくためにはどうすべきか、という議論はそこに至るまでの過程の段階にあるものだと思う。（中目課長）

→地域には防災以外にも様々な問題があるだろうが、それらの問題に住民が立ち向かっていくために必要な要素は共通していると思う。そのため、切り口を「防災」と設定したとしても、そこでの議論や提案は他の課題にも

応用が可能であると思う。(佐久間委員)

→では、大きな話題としてコミュニティの話があって、その中に防災という事例があるというイメージで考えればいいのか。(土田委員)

→コミュニティは重要である、という共通理解が必要ではないかという話だ
と思う。(佐久間委員)

・「防災に資する」という文言だと、防災訓練や講座を想起する。「防災」という言葉によってイメージが狭められてしまう印象がある。(辻委員)

→確かに「防災」というと、災害が起きるまでの話のことであり、災害が起きた後のことは関係無いというイメージかもしれない。(佐久間委員)

→どのように一致団結して防ぐかという雰囲気は事務局案からは強く感じられたが、むしろ、それが出来ない原因や、災害が起きたことで見えたことをどのように今後活かせるかを議論すべきだと思う。しかし、「防災」といわれるとそのあたりのイメージがやや見えにくいように感じる。(辻委員)

→御指摘の通りだと思う。事務局としても、災害が起きる前の「リスク管理」、災害が起きた後の「危機管理」の両面から協議する必要があると考えるところである。そのため、「防災」よりも適当な文言について検討する必要があるかもしれない。(中目課長)

(3) 報告事項：サッポロサタデースクール事業について

事務局から、資料5「サッポロサタデースクール事業実施要領」及びスライドショーを用いて、サッポロサタデースクール事業（以下、「サタデー」と呼ぶ。）について説明を行った。

○主な意見・質疑応答は以下のとおり。

・区ごとに実施校の数にムラがあるように感じる。特に西区に実施校が多いのはなぜか。(安田委員)

→サタデーの実施については、地域の方に参加して頂く体制を整える必要があるため、活発な地域では実施校が増える傾向にある。その点、西区は元気で活発な地域だと聞いているため、その影響があると思われる。また、前の学校でサタデーを実施していた校長先生が区内で異動になった際に、着任先でサタデーを始めるという形で広がるケースもある。(寺崎係長)

- ・自分の子どもが通学していた小学校でもサタデーが実施されていたが、学校が主体となっており、地域の方の参加はお手伝い程度に留まっているケースが多く、学校の先生方の負担がかなり大きかったのではないかと感じる。それは各学校の裁量が大きいことの裏返しだとは思いますが、担当課から実施校に対して、より地域を巻き込むための介入・助言等を行っているのか。（原田委員）

→サタデーの運営については、コーディネーターが肝になっている。そのため、コーディネーターの育成を目的とし、年2回、コーディネーター研修会を開催しており、その会の中で各学校のコーディネーター同士で意見交換・情報共有の機会を設けている。その他にも、担当課の職員がサタデーの現場を視察し、実際にサタデーを運営している学校の先生方や地域の方のお話を伺ったうえで助言を行ったり、NPOの方を統括コーディネーターとして派遣し運営のバックアップを行ったりといった取り組みを行っている。（寺崎係長）

- ・コーディネーターというものは、サタデー実施校であれば必ずどこの学校にも置いているものなのか。（山口委員）

→コーディネーターは必置である。（寺崎係長）

→説明の例で挙げられていた学校で実施されたサタデーのお手伝いに参加したことがあるが、地域の方ではないような方を講師に招いているプログラムがあったり、完全に学校主体で実施しているようなプログラムがあったりと、地域の顔が見えてこないと感じていた。（山口委員）

→その学校では、その学校の元校長先生にコーディネーターを行ってもらっている。ちなみに、コーディネーターは複数名設置することも可能で、各コーディネーターの得意分野でプログラムを企画するという実施例もある。サタデースクールをきっかけに、子どもたちのために何かやってみようかという意識がコミュニティづくりまで繋がれば理想的と考えている。（寺崎係長）

(4) その他

- 事務局から、今年度の会議スケジュール（案）について説明を行った。
- 次回の会議は、11月22日（金）に開催予定である。